

子どもの頃の親の離婚と大学生の恋愛関係 —親の離婚を経験した学生とそうでない学生の比較—

竹村 明子*・畠山 麻悠*・赤澤 淳子**

仁愛大学人間学部*・福山大学人間文化学部**

The Association between Parental Divorce and Young Adults' Romantic Relationships

A Comparison between University Students from Divorced Families and those from Intact Families

Akiko TAKEMURA* Mayu HATAKEYAMA* & Junko AKAZAWA**

Faculty of Human Studies in Jin-ai University*・Faculty of Human Cultures in Fukuyama University**

A history of parental divorce significantly influences young adults' romantic relationships. To examine the mechanism of association between parental divorce and the romantic relationships of young adults, 17 university students from divorced families and 251 from intact families took part in a study to compare their attitudes toward divorce and romantic relationships. The results revealed that compared with students from intact families, those from divorced families reported a less negative image of parents who divorce, and a more understanding attitude toward divorce, should it lead to happiness. Furthermore, for the students from divorced families, the stronger their negative image regarding divorce or parents who divorce, and the less understanding they were regarding divorce, the more they were inclined to control expressions of emotion toward romantic partners. For the students from intact families, however, only weak associations were found between attitudes toward divorce and romantic relationships. These findings are discussed in terms of their implications for future research.

キーワード：離婚，恋愛，青年

背景と目的

1. はじめに

厚生統計協会による人口動態統計によれば、2014年の離婚件数は22万2千組であり、2005年以降、わずかながら減少を示している（畠山、2015）。しかし、その年の婚姻数と離婚数の割合で見ると、結婚している夫婦の3組に1組が離婚していることとなり、離婚を経験する家庭は決して少なくない（日本家族心理学会、2013）。

親の離婚は子どもの発達に大きな影響を及ぼすことが報告されており（Amato, 2010; 1996）、親の離婚と子世代の発達の関係を明らかにすることは、発達心理学の重要な研究課題である。特に、子どもが青年期・

成人初期になった時、彼らの恋愛および結婚に様々な影響を与えることが報告されている（Cui & Fincham, 2010; Cui, Fincham, & Durtschi, 2011）。しかし親の離婚と子どもの恋愛との関係は単純ではなく、子どもが離婚に対してどのような態度や意識を持つのかにより、恋愛場面における行動が違ってくる。そこで本研究は、親の離婚と大学生の離婚および恋愛に対する意識の関係について明らかにすることを主な目的として検討する。

2. 理論的背景

Havighurst (1943) によれば、青年期の若者にとって、良好な恋愛関係を形成することは、重要な発達

課題の1つと考えられている。若者にとって恋愛は、①彼らの幸福感や自尊感情を高め、心理的適応に影響する、そして②両性の友人と成熟した人間関係の基盤となり、③将来の家庭生活を築く準備となる。よって、発達の視点から考えるならば、若者が結婚前に、どのような恋愛をし、恋愛に対してどのような価値観や認知を形成するのかが、彼らの将来に大きく影響する (Conger, Bryant, & Elder, 2000)。青年期の恋愛がその後の結婚や家庭生活に大きな影響を与えることを鑑みるならば、親の離婚が子世代の恋愛に与える影響に注目することは、発達心理学において重要な課題である (Bartell, 2006)。

親の離婚と子どもの恋愛の関係は、認知発達モデルと社会的学習理論を基に、以下のように推測されている。まず、認知発達モデルとは、人は子どもの頃に経験した記憶に基づき、他者や自己に関する認知 (例、自分の能力に関する確信、他者に対する信頼) を形成し、人はその認知を用いてその後の対人関係を築いていくという考え方である。本モデルに従うなら、子どもの頃に親の離婚を体験した子どもは、親の夫婦関係を基に恋愛に関する認知を形成し、彼らが青年や成人になった時、この認知が彼らの恋愛に対する態度・期待・行動を規定すると考えることができる (Bartell, 2006; Collins & Read, 1994)。次に、社会的学習理論とは、人は他者の活動を観察することにより、どのような行動が適切かを学習すると考える理論である (Bandura, 1977)。本理論に従うなら、親の離婚や夫婦間のトラブルを見て育った子どもは、親の行動から対人関係における行動を学習し、青年期になった時、恋愛場面においてその対立行動を再現すると推測される (Sanders, Halford, & Behrens, 1999)。

言い換えるなら、仲の悪い夫婦関係を見て育った子どもは、親密な関係に関して否定的イメージを形成し、青年期になった時、恋愛場面において相手に対して深い愛情を形成できない懸念がある。さらに、愛情の浅い恋愛経験は、その後の結婚や家庭生活に否定的影響を及ぼすと考えられる。

3. 親の離婚と子どもの恋愛の実証研究

まず、親の離婚と子世代の離婚の関係に関して、多

くの研究結果が報告されている。その主な結果は、離婚が世代間で伝達されることを示している (Amato & DeBoer, 2001)。具体的には、離婚家庭の若者は、そうでない若者に比べて、結婚生活に困難を抱え、彼ら自身も離婚する傾向が高い (Amato, 2001)。また、離婚家庭で育った若者は、結婚に関して悲観の見方をしており、離婚を結婚生活におけるトラブルの解決策と捉え (Amato, 1996; Trent & South, 1992)、結婚に対して時間やエネルギーを注ぐ傾向が低く (Amato & DeBoer, 2001; Sanders, Halford, & Behrens, 1999)、結婚生活を維持する自信も低い (Whitton, Rhoades, Stanley, & Markman, 2008)。

また、親の離婚と子世代の離婚の間のメカニズムとして、以下の要因の影響が報告されている。第1に結婚満足度が低いことである。Jacquet & Surra (2001) は、恋愛関係にある若者を対象に、離婚家庭の女性は、そうでない家庭の女性に比べ、恋愛関係に対して満足度が低いことを報告している。また Ross & Mirowsky (1999) は、親の離婚は、子どもの幸福感の低さと関連していることを見出している。第2に、結婚ではなく同棲を選ぶ傾向が高い事が挙げられる。Sassler, Cunningham, & Lichter (2009) は、離婚家庭の子は大人になると、そうでない家庭の子より、結婚より同棲を選ぶ傾向が高くなることを報告している。しかし、離婚家庭の子すべてに当てはまるわけではなく、離婚後の親が新たなパートナーとの関係で同棲を選択すると、その子どもも同棲する傾向が高くなるが、離婚後の親が結婚を選択した場合はそのような傾向は見られない。離婚後の親の再婚に関する態度が、子どもの結婚観や恋愛観に影響していることが示唆される。第三は、結婚の永続性に関する意識が低いことが挙げられる。Weigel (2007) によれば、離婚家庭の若者は、人と人との関係は永遠ではないというメッセージを選択する傾向が高いことを報告している。同様に離婚家庭の子は、長期的関係を望む傾向が低いことが、他の研究者より示されている (Booth, Brinkerhoff, & White, 1984; Gabardi & Rosen, 1992; Kinnaurd & Gerrard, 1986)。まとめるなら、離婚家庭で育った若者は、恋愛関係に関して満足度が低く、恋愛や結婚に努力を注ぐ傾向が低く、別れを問題解決の一手段

と捉えていることが示唆される (e.g., Kapinus, 2005; Trent & South, 1992).

親の離婚と子世代の離婚の関係に関する研究と比較すると、親の離婚と子どもの恋愛の関係を直接検討した研究報告は少ない。数は少ないながら、以下のような結果が報告されている。離婚家庭で育った若者は、対人関係を維持することに努力を注ぐ傾向が低く (Booth, Brinkerhoff, & White, 1984)、パートナーに対する信頼感が低く (Franklin, Janoff-Bulman, & Roberts, 1990)、結婚に関して楽観性が低く、相手との関係に関する満足度も低い (Ross & Mirowsky, 1999)。また、対人関係スキルが乏しく (Amato, 1996)、性的関係を持つ傾向が低年齢化しており (Gabardi & Rosen, 1992)、離婚を受容する態度を示しており、性的関係を持つ傾向が高い Kinnaird & Gerrard, 1986)。しかし、親の夫婦喧嘩が多いほど、子世代の恋愛場面行動に与える影響は、性により異なることが報告されている。具体的には、親の夫婦喧嘩が多いほど、男の子は自分自身の恋愛場面において攻撃的行動をとる傾向が高いが、女の子にはそれが見られない (Kinsfogel & Grych, 2004)。また、親の離婚が、子どもの結婚や離婚に対する意識に影響し、翻ってそれが子どもの恋愛場面での行動を規定している (Booth, Brinkerhoff, & White, 1984; Jacquet & Surra, 2001)。まとめるなら、離婚家庭で育った若者は、結婚に対して否定的イメージが高く、離婚に対してリベラルな評価をし、恋愛関係を維持する努力を注ぐ傾向が低く、そのために恋愛に対する満足度も低い、ことが示唆されている。

4. 本研究の目的

上述したように、親の離婚は青年期の若者の恋愛に影響することが報告されている。そして、そのメカニズムとして、離婚家庭の子どもが離婚に対してどのような考えを持っているのかということが影響していることが示唆されている。しかし、これらの研究は、主にアメリカの家族を対象に検討されたものであり、日本における研究は数が少ない。その中でも小田切 (2003) は、親の離婚を経験している学生の方が、経験していない学生に比べ、離婚家庭の親や子、離婚そ

のものに関して否定的イメージが低いことを報告している。しかし小田切 (2003) は、離婚に関する肯定的イメージ (例、離婚による人間的成長) について測定しながらも、親の離婚経験・有無との関係について明らかにしていない。また、山内・伊藤 (2008) は、親の夫婦関係を子世代の若者が高く評価する時には、親の夫婦関係は子世代の恋愛関係に肯定的影響を与えたが、親の夫婦関係を子どもが低く評価した時には、親の夫婦関係は子世代の恋愛関係に影響を与えていないことを報告している。しかし、彼らは親の離婚を経験した若者と、そうでない若者の比較をしているわけではない。そこで本研究は、親の離婚が子どもの恋愛にどのように影響しているのかを明らかにするために、親の離婚を経験した学生と、そうでない学生を対象に、彼らの離婚および恋愛に対する態度の違いについて比較検討をする。さらに、彼らの離婚観と恋愛観の関連の違いについても比較検討をする。

方 法

1. 調査協力者

私立大学 2 校の学生を対象に、質問紙調査を実施した。調査対象者は、男性 133 名、女性 170 名であった。このうち親の離婚を経験した学生 (以下、親離婚群) は 21 名 (男性 10 名)、親と死別した学生 1 名であり、経験していない学生 (親離婚無群) は 281 名 (男性 123 名) であった。親離婚群と親離婚無群の男女比に差はなかった ($\chi^2(1)=.12, n.s.$)。年齢に関して、親離婚群の平均年齢は 20.00 歳 ($SD=1.52$) で年齢幅は 18-23 歳であり、親離婚無群の平均年齢は 19.90 歳 ($SD=1.37$) で年齢幅は 18-26 歳であり、親離婚群と親離婚無群の年齢に差はなかった ($t_{(300)}=.33, n.s.$)。

親離婚群 21 名の属性について、現在親が再婚している者 2 名、親が再婚していない者 19 名であった。親の離婚を経験した時の年齢は多様であった (0 ~ 2 歳各 1 名、3 ~ 4 歳各 3 名、5 と 8 歳各 1 名、10 歳 4 名、12 歳 2 名、15 ~ 18 歳各 1 名)。

2. 調査手続きと倫理的配慮

本調査は 2015 年 10 ~ 11 月において 5 回実施した。調査のうち 3 回は、第 1 著者と第 2 著者が心理学の

講義において実施し、他の2回は第3著者が担当する講義において実施した。調査手続きはいずれも、質問紙を配布し、調査の目的および倫理的配慮について説明した後、回答を求め、その場で回収した。

本調査は親の離婚の経験について質問するものであり、回答者の心理的負担が大きいと考えられる。そこで、倫理的配慮として、調査時に調査の目的や個人情報保護について説明すると同時に、途中で気分が悪くなったり不快になったりした場合は回答を止めて構わないことを伝えた。

3. 調査項目

①**社会的デモグラフィック要因** 調査協力者の属性を調べるために、全協力者を対象に a. 家族構成, b. 恋愛経験の有無「恋愛経験(片思いも含め)はありますか」、c. 現在の彼氏・彼女の有無「現在、彼氏(彼女)はいますか」、d. 親の離婚経験の有無「親の離婚を経験しましたか」について回答を求めた。さらに親の離婚を経験したと答えた調査協力者を対象に、e. 親の離婚を経験した時の年齢, f. 親の再婚の有無について回答を求めた。

②**離婚観** 離婚に関してどのような意識を持っているのかを調べるために、小田切(2003)の離婚観尺度の5因子のうち、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』を除く4因子33項目を用いた。本尺度は、離婚に対する考えや意識、離婚する人に対するイメージを測定する尺度であり、『離婚する親への否定的イメージ』11項目(例、「子どもがいるのに離婚するのは親の身勝手である」)および『離婚に対する否定的評価』8項目(例、「自分の身内に離婚者がいても、周囲には言いたくない」)、『離婚による人間的成長』5項目(例、「離婚は、人生の再出発である」)、『女性の経済的自立による離婚増加』2項目(例、「女性が自立したので離婚が増えているのだろう」)、4因子のどれにも含まれていない7項目の合計33項目から構成された尺度である。小田切(2003)における各因子の α 係数は上述した順に、.82, .74, .52, .80であった。本研究の質問紙では、まず「一般的な離婚に対して、あなたはどのようなイメージを持っていますか。以下の各項目について、あなた自身の考えを回答してくだ

さい」と教示した後、「そう思わない」(1点)、「どちらかといえばそう思わない」(2点)、「どちらかといえばそう思う」(3点)、「そう思う」(4点)の4段階で回答を求めた。

③**恋愛観** 現在または過去の恋愛関係における態度について調べるために、山内・伊藤(2008)の恋愛観尺度のうち一部の質問項目を用いて測定した。本尺度は『愛情』12項目、『抑制』4項目、『葛藤』7項目の3因子23項目から構成される尺度である。しかし調査協力者の負担を軽減するために、山内・伊藤(2008)において、因子別に因子負荷量の高い順に各4項目(3因子の合計12項目)を選択し本研究の調査に用いた。本研究の質問紙には、まず「現在を含め、これまで経験した自分自身の恋愛全般についてお答えください。以下の項目の、恋人に対する自分の態度に最も当てはまると思う数字に○をつけてください」と教示した後、「全くそう思わない」(1点)から「非常にそう思う」(6点)の6段階で回答を求めた。

4. 分析方法

本研究では、使用した尺度(e.g., 離婚観尺度)の信頼性を検討するために、まず因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行い、本研究の調査対象者においても、先行研究(e.g., 小田切, 2003)と同じ因子構造が見いだされる事を確認し、次に、各下位因子に関してCronbachの α 係数を算出し、各下位因子には十分な内的整合性があることを確認した。本研究の分析は、すべてIBM SPSS statistics 23ソフトウェアを用いて行った。

結 果

1. 離婚観の因子分析結果

離婚観尺度の因子構造を確認するために、全調査対象者のデータについて、主因子法・バリマックス回転を用いて因子分析を行った。最初、小田切(2003)に基づき4因子に指定して因子分析を行ったが、解釈可能な解が得られなかった。そこで、因子数を3因子に指定したところ、『離婚する親に対する否定的イメージ』と『離婚に対する否定的イメージ』が同一因子としてまとまって抽出された。さらに、どの因子

に対しても負荷量が .35 以下の 6 項目 (例, 「子どもが成人になるまでは離婚しない方がいい」と, 複数の因子に渡り負荷量の高い 2 項目 (「離婚することで, 人間的に成長する面があるだろう」, 「離婚すると子どもにストレスがかかる」) を除外し, 改めて因子分析を行ったところ, 解釈可能な解が抽出された. 結果を Table 1 に示す.

まず, 第 1 因子には, 小田切 (2003) の『離婚する親に対する否定的イメージ』と『離婚に対する否定的イメージ』の項目が抽出された. 具体的には「離婚ははずかしいことである」や「離婚家庭の子どもは片親でかわいそう」などの 17 項目が抽出された. 小田切 (2003) では, 『離婚する親に対する否定的イメージ』と『離婚に対する否定的イメージ』は, 異なる因子として抽出された. しかし本研究では, 両因子は離婚全般に対する否定的なイメージとして, 同一因子として抽出されたと考えられ, この第 1 因子を『離婚全般に対する否定的評価』(以下, 離婚否定)と命名した. 第 2 因子は, 「離婚して幸せになれるのなら, 離婚してもよいと思う」や「子どもに両親の絶え間ない喧嘩を見せるより離婚した方がよい」などの 6 項目が抽出された. 6 項目のうち 2 項目 (「離婚家庭の親はひとりで両親の役割を担い苦労しているだろう」, 「離婚は人生の再出発である」) は小田切 (2003) の『離婚による人間的成長』因子に含まれる項目であるが, 他の 4 項目 (例, 「離婚して幸せになれるのなら, 離婚してもよいと思う」) は小田切 (2003) ではどの因子にも含まれない項目であった. そこで項目の内容を基に『離婚に対する理解』(以下, 離婚理解)と命名した. 第 3 因子は, 小田切 (2003) と同様に「女性が経済力を身につけたので離婚が増加しているのだから」および「女性が自立したので離婚が増えているのだから」の 2 項目から構成されており, 『女性の経済的自立による離婚増加』(以下, 離婚と自立)と命名した.

因子別に抽出された項目の平均値を算出し, 下位因子得点とした. 各下位因子の Cronbach の α 係数は, 離婚否定 $\alpha = .86$, 離婚理解 $\alpha = .64$, 自立と離婚 $\alpha = .80$ (自立と離婚は 2 項目から構成される因子であることから, spearman-Brown の公式による信頼性係数も同時に算出し $r = .80$ と信頼性が充分であるこ

Table 1 離婚親の因子分析結果 (主因子法・バリマックス回転)

質問項目	因子負荷量			共通性 h^2
	F1	F2	F3	
第 1 因子 (F1) 離婚に対する否定的イメージ ($\alpha = .86$)				
14 離婚ははずかしいことである	.63	-.23	.18	.48
20 離婚家庭の子どもは片親でかわいそう	.60	-.03	.03	.36
18 もし自分が離婚したら人には言いたくない	.59	.08	-.05	.35
23 安易な気持ちで結婚する人が離婚するのだから	.56	.05	.13	.33
21 離婚すると社会的信用を失う	.55	-.17	.23	.38
4 離婚だけはどんなことがあっても避けたい	.53	.06	-.14	.31
28 妻や子どもに対して無責任な男性が離婚するのだから	.53	.12	.21	.34
2 離婚した人は人生の敗北者である	.53	-.31	.03	.37
17 離婚する人は子どもへの愛情が少ない人である	.53	-.16	.23	.35
7 子どもには両親がそろっていることが必要である	.52	.20	-.04	.31
26 我慢できない人が離婚するのだから	.51	-.02	.10	.27
5 自分の身内で離婚者がいても周囲に言いたくない	.50	.05	-.11	.27
13 離婚する人は子どもへの愛情が少ない人であるくらいなら結婚しなければよい	.48	-.08	.07	.24
1 子どもがいるのに離婚するのは親の身勝手である	.43	-.02	-.03	.19
30 性格的に問題のある人が離婚をするのだから	.40	.13	.15	.20
8 離婚すると社会的信用を失う交友範囲が狭くなる	.38	-.12	.22	.21
24 離婚したら周囲から同情の目で見られるだろう	.37	.14	.11	.17
第 2 因子 (F2) 離婚に対する理解 ($\alpha = .64$)				
29 離婚して幸せになれるのなら, 離婚してもよいと思う	-.13	.64	-.09	.43
32 離婚家庭の親はひとりで両親の役割を担い苦労しているだろう	.18	.54	-.09	.33
22 子どもに両親の絶え間無い喧嘩を見せるより離婚した方がよい	.02	.48	.14	.25
12 離婚は人生の再出発である	-.06	.41	.07	.17
25 離婚すると女性のほうが男性よりも苦労するだろう	.27	.37	-.01	.21
27 今の世の中, 離婚はよくあることである	-.07	.37	.07	.15
第 3 因子 (F3) 離婚と自立の関連 ($\alpha = .80$, Spearman-Brown's $\rho = .80$)				
19 女性が経済力を身につけたので離婚が増加しているのだから	.12	.17	.80	.69
16 女性が自立したので離婚が増えているのだから	.08	.06	.72	.54
累積寄与率 (%)	18.52	25.46	31.67	

とを確認した)であった. 離婚理解の α 係数は .70 より低い値であったが, 分析に耐えられる値であると考え, そのまま分析に用いた.

2. 結婚観の因子分析結果

結婚観尺度の因子構造を確認するために、全調査対象者のデータについて、主因子法・バリマックス回転を用いて因子分析を行った。その結果、Table 2 に示した通り、山内・伊藤 (2008) と同じ、想定した通りの因子構造が抽出された。第1因子は、「相手のことを魅力的だと思っている」など、パートナーに対する愛情を示す4項目から構成されており『愛情』と命名した。第2因子は「相手に対して不満があっても、うちあけられない」など、自分の意思や感情を相手に素直に表出できないことを示す4項目から構成されており『抑制』と命名した。第3因子は「相手にいやみを言う」など、相手との関係における葛藤状態を示す4項目から構成されており『葛藤』と命名した。

各因子に高い負荷量を示す項目の平均値を算出し、下位因子得点とした。各下位因子の α 係数は、愛情 $\alpha = .83$ 、抑制 $\alpha = .72$ 、葛藤 $\alpha = .71$ であり、十分な内的整合性を示した。

Table 2 恋愛観尺度の因子分析結果 (主因子法, バリマックス回転)

質問項目	因子負荷量			共通性 h^2
	F1	F2	F3	
第1因子 (F1) 愛情 ($\alpha = .83$)				
7 相手のことを魅力的だと思っている	.81	.06	-.08	.59
10 相手に対して優しくする	.74	.17	-.06	.52
1 相手のことが好きだ	.72	.03	.00	.53
12 相手をよくほめる	.72	.02	-.02	.47
第2因子 (F2) 抑制 ($\alpha = .72$)				
5 相手に対して不満があっても、うちあけられない	.03	.75	.03	.44
9 相手に遠慮することがある	.13	.70	.15	.44
6 何かと相手に合わせる	.17	.65	.05	.36
3 相手に対して、いやなことはいやだときちんと言え (R)	.40	-.46	.27	.38
第3因子 (F3) 葛藤 ($\alpha = .71$)				
8 相手にいやみを言う	-.04	.06	.73	.42
11 相手につらくあたることがある	.18	-.03	.66	.42
4 話していてもすぐけんかになる	-.13	.01	.64	.35
2 話がかみ合わない	-.20	.32	.48	.36
累積寄与率 (%)				21.08 36.30 50.67

(R) は逆転項目を表す

3. 親の離婚経験の有無と、恋愛経験の違い

親の離婚を経験した学生と、そうでない学生では、恋愛経験に違いがあるのか検討した。2つの質問項目

(恋愛経験の有無と彼氏・彼女の有無) について、親の離婚経験の有無 \times 恋愛経験 (または彼氏・彼女の有無) の人数を算出し、 χ^2 検定を行った。その結果、Table 3 に示した通り、親の離婚経験の有無により、恋愛経験や現在の彼氏・彼女の有無に違いは見られなかった (恋愛経験の有無: $\chi^2 (1) = .96, n.s.$; 現在の彼氏・彼女の有無: $\chi^2 (1) = .30, n.s.$)。

Table 3 親の離婚経験の有無と恋愛経験の違い

		親の離婚経験		合計
		有	無	
恋愛経験	有	20	232	252
	無	2	48	50
現在の彼氏 (彼女)	有	4	65	69
	無	18	214	232

注) 数字は人数を表す。

4. 親の離婚経験の有無と、離婚観・恋愛観の違い

親の離婚を経験した学生と、そうでない学生では、離婚や恋愛に関する意識に違いがあるかどうかを検討するために、離婚観3因子と恋愛観3因子別に、親の離婚経験の有無別に平均値を求め、差の検定 (t 検定) を行った。その結果を Table 4 に記す。尚、これ以降の分析では、離婚観および恋愛観の質問項目に対して欠損値の無い調査協力者 (親の離婚を経験した学生17名、経験の無い学生251名) のデータを用いた。

まず離婚観について、離婚否定および離婚理解の2つの因子において、5%水準で有意な差が見られた。具体的には、離婚否定において、親の離婚を経験している学生の方 ($M=2.00$) は、そうでない学生 ($M=2.30$) より、得点が低かった ($t=2.54, p < .05$)。また、離婚理解において、親の離婚を経験している学生 ($M=3.27$) は、そうでない学生 ($M=3.00$) より、得点が高かった ($t=2.17, p < .05$)。以上の結果より、親の離婚を経験している学生の方が、離婚に対して否定的評価が低く、離婚に対して理解する態度を示していることがわかった。

次に恋愛観において、5%水準では有意な差が見いだされなかったが、10%水準で葛藤において有意な差が見いだされた。具体的には、親の離婚を経験した学生 ($M=2.42$) は、そうでない学生 ($M=2.84$) より、得点が低かった ($t=1.79, p < .10$)。この結果は、親の

離婚を経験した学生は、恋愛場面において相手にいやみを言うなどの態度が、低い傾向にあることを示している。

Table 4 親の離婚経験の有無と離婚観・恋愛観の違い

	親の離婚経験		
	有	無	
離婚観			
離婚否定	2.00 (.49)	2.30 (.47)	$t = 2.54, p < .05$
離婚理解	3.27 (.38)	3.00 (.51)	$t = 2.17, p < .05$
離婚と自立	2.06 (.98)	2.13 (.79)	<i>n.s.</i>
恋愛観			
愛情	4.88 (.83)	4.48 (1.02)	<i>n.s.</i>
抑制	3.72 (.74)	3.72 (.76)	<i>n.s.</i>
葛藤	2.41 (.61)	2.84 (.96)	$t = 1.79, p < .10$

注) 数字は平均値を、() 内は標準偏差値を表す。

5. 親の離婚の体験別、離婚観と結婚観の関係

親の離婚を経験した学生と、そうでない学生では、離婚観と恋愛観の間の関連に違いがあるかを検討するために、親の離婚の経験の有無別に、離婚観と恋愛観の相関分析、および恋愛観の下位因子間の相関分析を行った。その結果、以下のような違いが見られた (Table 5 参照)。

第1に、親の離婚を経験した学生では、離婚観と恋愛観の間に中程度の関連が見いだされたのに対して、経験の無い学生では両者の関連は弱いものであった。具体的には、親の離婚を経験した学生では、離婚観の離婚否定が低いほど、そして離婚理解が高いほど、恋愛観の抑制が低いことがわかった (順に $r = .54, -.47, p < .10$)。また、離婚観の離婚と自立が低いほど、恋愛観の愛情が高いことがわかった ($r = -.60, p < .05$)。一方、親の離婚を経験していない学生では、離婚観の離婚理解が高いほど、恋愛観の抑制が高いことのみが見出され、その相関係数も低い値であった ($r = .13, p < .05$)。これらの結果は、親の離婚を経験した学生において、どのような離婚観を抱いているのかが、彼らの恋愛に影響していることを示している。

第2に、恋愛観の下位因子間の相関係数に関して、親の離婚を経験した学生では、恋愛観の愛情が高いほど抑制が低い ($r = -.41, p < .10$) のに対して、経験のない学生では、恋愛観の愛情が高いほど抑制が高く (r

$= .38, p < .001$)、抑制が高いほど葛藤が高い ($r = .26, p < .001$) ことが見いだされた。これらの結果は、親の離婚経験の有無により、恋愛行動や意識のメカニズムが異なることを示している。

Table 5 親の離婚体験群と親の離婚体験無群における離婚観と恋愛観の相関分析結果

	離婚否定	離婚理解	離婚と自立	恋愛愛情	恋愛抑制	恋愛葛藤
離婚観						
離婚否定		.07	.20**	.04	.07	-.10
離婚理解	.06		.14*	.10	.13*	.01
離婚と自立	.36	-.09		-.06	.08	.02
恋愛観						
愛情	-.24	.19	-.60***		.38***	-.06
抑制	.54*	-.47†	.22	-.41†		.26***
葛藤	.08	.02	-.16	-.23	.00	

注) 左下は親の離婚体験群 ($n=17$) の相関係数を表し、右上は親の離婚体験無群 ($n=251$) の相関係数を表す。
† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

考 察

本研究は、親の離婚を経験することが、大学生の恋愛に与える影響を明らかにするために、親の離婚を経験した大学生と、経験のない大学生を対象に、彼らの離婚に対する意識および恋愛における態度の違いについて比較検討をした。その結果、両者に恋愛経験の違いはないものの、離婚に対する意識や、離婚観と恋愛観の関連について、以下のような違いが見出された。

1. 親の離婚経験の有無と離婚観の違い

離婚に対する意識に関して、親の離婚を経験した学生は、経験のない学生に比べ、離婚全般に対して否定的評価 (例、安易な気持ちで結婚する人が離婚するのだろう) が低く、離婚に対する理解 (例、離婚して幸せになれるのなら、離婚してもよいと思う) が高いことが明らかとなった。先行研究 (e.g., 小田切, 2003; Trent & South, 1992) において、親の離婚を経験した若者は、離婚に対する否定的評価が低く、離婚に対してリベラルな態度 (理解) を示す傾向が高い、という結果が方向されており、本研究の結果はこれと一致する。親の離婚を経験した若者は、離婚を選択した親の生活を身近で見えており、離婚や離婚する大人を安易に否定せず、理解しようと努めてきたことが、この結果

に反映しているのかもしれない。

ところで、本研究の離婚観の下位因子「離婚に対する理解」には、多様な意味が含まれることに注意する必要がある。離婚に対する理解の項目には、「離婚して幸せになれるのなら、離婚してよいと思う」や「子どもに両親の絶え間ない喧嘩を見せるより離婚した方がよい」、「離婚は人生の再出発である」という項目が含まれている。これらの項目は、離婚に対して肯定的に理解する態度を表すと同時に、結婚生活に問題が生じた時には問題解決の方法として離婚をしても良いという態度も表している。先行研究では、親の離婚を経験した若者は、結婚生活がうまく行かなくなった時の解決方法として、離婚を考える傾向が高く、それが恋愛解消や離婚の高さに反映しているという報告がある(e.g., Amato & DeBoer, 2001)。親の離婚を経験した大学生が、離婚に対して理解を示すことが、恋愛関係の安易な解消につながるのか否かに関しては、今後の検討課題として残る。

2. 親の離婚経験の有無と離婚観－恋愛観の関連

離婚観と恋愛観の関連について、親の離婚を経験した学生では、離婚観と恋愛観の関連が強かったのに対して、親の離婚の経験がない学生では、離婚観と恋愛観の関連は弱いものであった。すなわち、親の離婚を経験した若者にとって、彼らの持つ離婚に対する意識が、どのような恋愛関係を築くのかの重要な規定要因となっていることを示している。先行研究により、親の離婚の有無と子どもの恋愛の関係は単純ではなく、子どもがどのような離婚観を持つのかにより異なることが報告されており、本研究の結果はこれと符合するものである(e.g., Cui & Fincham, 2010)。認知発達モデル(e.g., Bartell, D.S.)が述べるように、親の離婚は、子どもの恋愛や結婚に関する態度・認知の形成に影響し、子どもが青年期になった時、彼らの恋愛相手との付き合い方に影響することが示唆される。

親の離婚を経験した学生の離婚観と恋愛観の関連を具体的に見ていくと、離婚に対して否定的評価が高いほど(離婚否定が高く、離婚理解が低いほど)、恋愛場面において相手に不満を打ち明けずに、遠慮する傾向が高いことが見られた。また、女性が自立する

ようになったから離婚が増えたという意識が高いほど、恋愛場面において相手に愛情を示す傾向が低かった。さらに、彼らは、恋愛相手に対して感情表現を抑制するほど、愛情表現も低いことを示していた。これらの結果は、親の離婚を経験した学生は、離婚を否定するだけでなく、離婚と女性の自立を結びつけるような考え方を持つほど、恋愛相手と親密な関係を築く傾向が低いことを示している。先行研究により、離婚家庭の青年は、恋愛や結婚の関係に対する関与が低い(努力を注ぐ傾向が低い)ことが報告されている(e.g., Whitton et al., 2008)。しかし、本研究の結果を踏まえるなら、離婚家庭の若者がどのような離婚観を持っているのかにより、恋愛関係への関与の仕方が異なってくると推測される。すなわち、離婚家庭の若者が離婚を否定的に捉えるなら、恋愛場面において感情表現を抑制し愛情を示さないが、離婚を肯定的に捉えるならば、逆に、恋愛相手に対して愛情や感情を表現し、親密性を深めようとするのが推測される。親の離婚を経験した若者の恋愛のメカニズムを明らかにするためには、彼らの離婚観との関連について、さらに詳しく調べていくことが、今後重要となるだろう。

3. 本研究の限界

本研究の限界として、以下の点が指摘される。

第一に、調査対象者の問題が挙げられる。本研究において、親の離婚を経験した学生は21名であり、本研究ではそのうち欠損値のない17名のデータを分析に用いた。この17名は全員私立大学に所属する学生であり、親の離婚を経験した若者を代表するサンプルであると言うことは難しい。今後は、多様な集団から、親の離婚を経験した若者のデータを多数集めて検討することが必要である。

第二に、本研究で取り上げた変数の問題が指摘される。本研究では、親の離婚と子どもの恋愛観との間に影響する要因として、子どもが持つ離婚観に注目し検討を行った。しかし、親の離婚と子どもの恋愛観との間には、その他さまざまな要因(例、離婚時の心理的負担、離婚後の経済的状況)が関わるのが先行研究により示されており、それらの要因を明らかにする事は今後の課題として残った。

第三に、本研究は横断的調査であり、因果関係が特定できないことが指摘される。本研究では、大学生の離婚観が恋愛に影響するのか、彼らの恋愛観が離婚観に影響するのか明らかにすることはできず、因果関係の検討は今後の課題として残る。

第四に、恋愛観に関する問題が指摘される。山内・伊藤（2008）は、親の夫婦関係が良好か否かに関わらず、大学生が恋愛相手に愛情表現をするほど感情を表現する（遠慮せずに不満を伝える）ことを報告している。本研究において、親の離婚を経験した学生では彼らと同じ結果が示された。しかし、そうでない学生では逆の結果が示された。すなわち、本研究の親の離婚経験がない学生は、恋愛相手に愛情表現を示すほど、相手に感情を表現することを抑制する（遠慮し、不満をうちあけない）傾向が見られたのである。彼らは、相手に愛情を示すほど、相手の気持ちを気遣うあまり、自分の不満や不快な感情を表すことを抑制しているのかもしれない。また、交際期間や深度の違いや、所属する社会の規範により恋愛相手への感情表出が異なること、などの要因が影響している可能性も考えられる。本研究では、この結果を解釈することができず、このメカニズムを明らかにするためには、新たな検討が必要である。

付記

本研究は、第二筆者が卒業論文（畠山麻悠『親の離婚を経験した有無による離婚観と結婚観への影響』）に用いたデータを、異なる視点から再分析を行い、新たな研究としてまとめたものである。

本研究は、仁愛大学共同研究費の助成を受けたものである。

引用文献

Amato, P. R. (1996). Explaining the intergenerational transmission of divorce. *Journal of Marriage and the Family*, **58**, 628–640.

Amato, P.R. (2010). Research on divorce: Continuing trends and new development. *Journal of Marriage and Family*, **72**, 650-666.

Amato, P. R., & DeBoer, D. D. (2001). The transmission of marital instability across generations: Relationship skills or

commitment to marriage? *Journal of Marriage and Family*, **63**, 1038–1051

Bandura, A. (1977). *Social learning theory*. Oxford, England: Prentice-Hall.

Bartell, D. S. (2006). Influence of parental divorce on romantic relationships in young adulthood: A cognitive-developmental perspective. In M. A. Fine & J. H. Harvey (Eds.), *Handbook of divorce and relationship dissolution* (pp. 339–360). Mahwah, NJ: Erlbaum.

Booth, A., Brinkerhoff, D. B., & White, L. K. (1984). The impact of parental divorce on courtship. *Journal of Marriage and the Family*, **46**, 85–94.

Collins, N. C., & Read, S. J. (1994). Cognitive representations of attachment: The structure and function of working models. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Attachment processes in adulthood: Vol. 5. Advances in personal relationships* (pp. 53–90). London: Jessica Kingsley.

Conger, R. D., Cui, M., Bryant, C. M., & Elder, G. H., Jr. (2000). Competence in early adult romantic relationships: A developmental perspective on family influences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 224–237.

Cui, M., & Fincham, F.D. (2010). The differential effects of parental divorce and marital conflict on young adult romantic relationships. *Personal Relationships*, **17**, 331-343.

Cui, M., Fincham, F.D., & Durtschi, J.A. (2011). The effect of parental divorce on young adults' romantic relationship dissolution: What makes a difference?. *Personal Relationships*, **18**, 410-426.

Franklin, K.M., Janoff-Bulman, R., Roberts, J.E. (1990). Long-term impact of parental divorce on optimism and trust: Changes in general assumptions or narrow beliefs?. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 743-755.

Gabardi, L., & Rosén, L.A. (1992). Intimate relationships: College students from divorced and intact families. *Journal of Divorce & Remarriage*, **18**, 25-56.

Havighurst, R.J. (1943). *Human development and education*. New York: Longmans, Green. (荘司雅子訳 1958 人間の発達課題と教育 牧書店)

畠山麻悠 (2015). 親の離婚を経験した有無による離婚観と恋愛観への影響. 仁愛大学人間学部心理学科卒業論文要旨集. p.40.

Jacquet, S. E., & Surra, C. A. (2001). Parental divorce and premarital couples: Commitment and other relationship characteristics. *Journal of Marriage and the Family*, **63**, 627–638.

Kapinus, C. A. (2005). The effect of parental marital quality

- on young adults' attitude toward divorce. *Sociological Perspectives*, **48**, 319–335.
- Kinnaid, K. L. & Gerrard, M. (1986). Premarital sexual behavior and attitudes toward marriage and divorce among young women as a function of their mothers' marital status. *Journal of Marriage and the Family*, **48**, 757-765.
- Kinsfogel, K. M., & Grych, J. H. (2004). Interparental conflict and adolescent dating relationships: Integrating cognitive, emotional, and peer influences. *Journal of Family Psychology*, **18**, 505–515.
- 小田切紀子 (2003) 離婚に対する否定的意識の形成過程: 大学生を対象として, 発達心理学研究, **14**, 245-256.
- 日本家族心理学会 (2013). 現代の結婚・離婚. 東京: 金子書房
- Ross, C. E. & Mirowsky, J. (1999). Parental divorce, life-course disruption and adult depression. *Journal of Marriage and the Family*, **61**, 1034-1045.
- Sanders, M. R., Halford, W.K. & Behrens, B.C. (1999). Parental divorce and premarital couple communication. *Journal of Family Psychology*, **13**, 60-74.
- Sassler, S., Cunningham, A., & Lichter, D. T. (2009). Intergenerational patterns of union formation and relationship quality. *Journal of Family Issues*, **30**, 757–786.
- Trent, K., & South, S. (1992). Sociodemographic status, parental background, childhood family structure, and attitude toward family formation. *Journal of Marriage and the Family*, **54**, 427–439
- Weigel, D. J. (2007). Parental divorce and the types of commitment-related messages people gain from their families of origin. *Journal of Divorce and Remarriage*, **47**, 15–32.
- Whitton, S. W., Rhoades, G. K., Stanley, S. M., & Markman, H. J. (2008). Effects of parental divorce on marital commitment and confidence. *Journal of Family Psychology*, **22**, 789–793.
- 山内星子・伊藤大幸 (2008) 両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響—青年自身の恋愛関係を媒介変数として. 発達心理学研究, **19**, 294-304.

和文要約

親の離婚を経験することは、子どもが青年期になった時、彼らの恋愛や対人関係に様々な影響を及ぼす。本研究は、親の離婚の経験が青年期の若者の恋愛に与える影響を明らかにするために、親の離婚を経験した大学生 (n=17) と、経験の無い大学生 (n=251) を対象に、彼らの離婚に対する考え方および恋愛におけ

る態度について比較検討した。その結果、親の離婚を経験した大学生は、そうでない大学生に比べ、離婚をする親に対する否定的イメージが低く、逆に幸せになれるのなら離婚しても良いという離婚を理解する態度が高いことがわかった。さらに、親の離婚を経験した大学生では、離婚や離婚する親に対する否定的イメージが高いほど、また離婚を理解する態度が低いほど、恋愛場面において感情表現を抑制する傾向が見いだされた。一方、親の離婚経験のない大学生ではこのような関連は弱いものであった。最後に、本研究の結果を踏まえ、親の離婚が若者の恋愛に与える影響について考察を行った。